

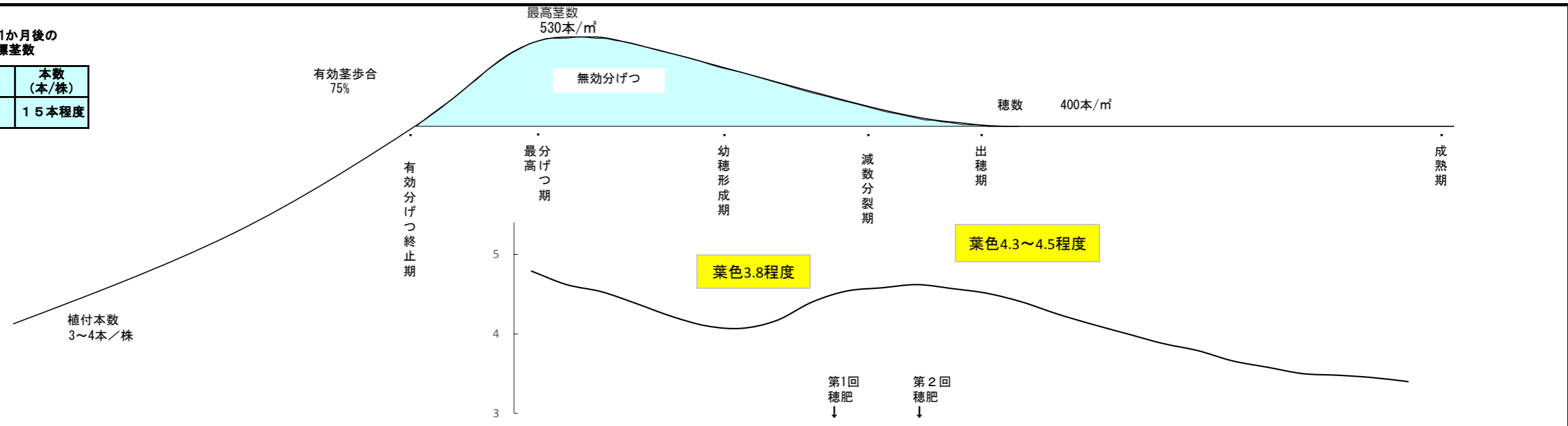
# 「新大正糯」の栽培ごよみ

## 収量構成の目安

収量構成	目安
㎡当り最高莖数(本)	530
有効莖歩合(%)	75
㎡当たり穂数(本)	400
平均一穂粒数(粒)	70
㎡当たり着粒数(百粒)	280
登熟歩合(%)	80
玄米千粒重(g)	21.5

田植え1か月後の  
目標莖数

植付株数	本数(本/株)
70株	15本程度



月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月		
草刈時期		★	★	★	★	★	★		
生育区分		育苗期	田植期 活着期	有効分げつ期	無効分げつ期	幼穂形成期 出穂23日前	穂ばらみ期 出穂10日前	登熟期	収穫期
管理作業		やや深水(4~5cm)	浅水管理(2~3cm)	中干しの徹底	間断かん水	幼穂形成期以降は飽水管理 (足跡の水が切れないように管理)	出穂から20日間は湛水状態を保つ	落水を急がない	
栽培管理のポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 土づくり資材の散布</li> <li>・ 田面の均平をよくする</li> <li>・ 播種量は乾籾で一箱当り 120g 以下としてよい苗を作る</li> <li>・ 天候に合わせた温度管理を確実にを行う</li> <li>・ 病害虫予防のため育苗ハウス外で散布する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 育苗機は育苗ハウスの外で散布する</li> <li>・ 田植機の株数設定は 70 株/坪 に設定して作業を行う</li> <li>・ 5月 10日頃を中心に田植を行い荒天時の田植は避ける</li> <li>・ 全層施肥の場合は早期追肥を田植え後7日以内に施用する</li> <li>・ 田植後3日間はやや深水として活着を早める</li> <li>・ 一株の植付け本数は 3~4本とし、3cm程度の深さに植える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ かん水は朝又は夕方に短時間に行う</li> <li>・ 良質の茎を早く確保する</li> <li>・ 除草剤散布は適期に行い、環境汚染に配慮し1週間程度は止水とする</li> <li>・ 活着後は浅水管理とし、日中は止め水で田水温を高める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 適正な中干しにより、根の活力を高めるとともに過剰分げつを抑制する</li> <li>・ 早めに手溝を掘り、水のかん排水の効率化を図る</li> <li>・ 中干し後は間断かん水を繰り返し土壌を固くする</li> <li>・ 中干しの開始は遅れないよう確実に行う(田植え後1か月までに実施)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 畦畔草刈りでカメムシ密度を下げる</li> <li>・ 幼穂形成期の葉色を 3.8 程度に誘導する</li> <li>・ 幼穂形成期以降は飽水管理(足跡に水が切れないように管理する)</li> <li>・ 1回目穂肥は幼穂長 10~20mm を確認してから慎重に行う</li> <li>・ 2回目穂肥は1回目の7日後に確実に行う</li> <li>・ 本田防除の徹底(適期防除の実施)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 穂揃期の葉色を 4.2~4.5 に誘導する</li> <li>・ 圃場全体に水が行きわたっているか確認する</li> <li>・ 湛水期間はこまめに水を入れ、田水温の上昇を防ぐ</li> <li>・ 収穫前に必ずクサネムやヒエなどの雑草を抜き取る</li> <li>・ フェーン時はかん水して、葉身の萎れを防ぐ</li> <li>・ 刈取り予定日の5~7日前まで間断かん水する</li> <li>・ 穂発芽しやすいので倒伏・刈遅れに注意</li> <li>・ 適期内に刈取り、刈遅れの無いように注意する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 稲わらの腐熟を促進するため、秋起しを行い、排水溝を設置する</li> <li>・ 土づくり肥料はそれぞれの基準量を確実に施用する</li> <li>・ 土づくりに努める</li> </ul>		

←本田防除以降、収穫までは草刈りをしない→